分科会「聾史入門」
－聾史を楽しみましょう－

講師／那須英彰　司会・亀田明美

●司会　ただ今からはじめます、広島から来ました亀田と言います。司会の経験がなく、参加者が１番多い分科会なのでとても緊張しています。色々不手際があるかも知れませんが、みなさんのやさしいご協力のもとがんばりたいと思います。これから２時間、テーマは「歴史研究の楽しみとは何か」、講師は那須さんです。途中休憩があります。終わった後にまた那須さんに公演をしていただきその後、質疑応答の予定です。では、よろしくお願いします。

●那須　那須です。ここ北海道で聾史をやるのを楽しみにしていました。以前、私は、札幌で歴史についての公演をやりました。今回は歴史研究の楽しみとは何か、入門講座なので、難しいお話しですとみなさん退屈してしまうと思うので、楽しくお話ししていきたいと思います。

他の分科会はとても難しい専門的な分科会ですが、ここで歴史のおもしろみに興味をもち、研究をしてもらい更にレベルアップしていきながら、その次はむずかしい専門的な内容を学んでいくといいと思います。こちらは楽しくすすめていきたいと思っています。

歴史ですが、学校で学んだときに日本史を学びましたよね。豊臣秀吉とか、織田信長とか、平安時代とか、奈良時代とか。一方で世界史、アメリカとかヨーロッパ、中国そういう国々の歴史を学びました。

歴史ですけども、なぜ必要だと思いますか？例えば、会社に入ったときに生まれはいつか、生まれた場所はどこか、最終学歴はいつ、どこの大学か、そういう履歴がありますよね。それを会社に提出して面接を受けますが、その履歴書が重要なのです。

日本の歴史、世界の歴史の本は、たくさん出版していますが、ろうあの歴史の本はとても少ないですよね。この大会もまだ９回目です。だから今、一生懸命資料を集めています。資料がたくさん集まりましたら、今後うまく纏めて、それを本にして発行できたらいいと思います。

さて、「聾」という漢字はあるのですが、聴覚障害者、もしくは聴力障害者という言葉を使用するようになってきたから、現在の資料は「聾」という漢字表示が少なくなってきたように感じます。昔の資料では漢字の「聾」だけでなく、「聾唖」、「唖」もあります。もっと古い資料の中では、聞こえないことを「於々寸（おおし）」、「於布志（おふし）」、「不レ言（こといわず）」と記入されている資料もあります。そういう漢字を調べていくと、これは何か？その背景は何か？など読んでいくと、昔ろう者がいたんだなとわかるようになるわけです。それが楽しいですよね。調べるといろいろわかるようになり、面白みが出ると思いませんか。

昔は「つんぼ」という言い方がありましたね。その漢字が「聾」です。「つんぼ」という言い方は差別語だということで、言わなくなっていますね。けれども歴史を見ると「つんぼ」という言葉はもともと差別用語ではなく、普通に使われていたわけです。「つんぼ座敷」や「聾の笠印」というふうにつんぼに関する言葉が昔の文献には載せてあります。そういうふうに記述されている資料はろう史を知る重要な資料です。

次に面白いことを話したいと思います。聾という漢字は龍という漢字に耳がついています。なぜこういう漢字なのでしょうか？不思議ですね。でも色々文献を調べると、以前中国で考えられた漢字です。そして日本にやってきました。龍には耳がありますか？　ありませんか？　どうですか？

正確には龍は小さいですが、耳があります。文献によると、龍は音を聞き取ることのできない架空の動物で、角で音を探るのです。耳は形だけで、本当の音を聞くためのものじゃないとのことです。これは素晴らしい漢字だと思いませんか。

江戸時代に青木木米という陶芸家がいました。中年になって窯での事故で聞こえなくなったと文献に載ってありました。聾になった後は陶芸で作った作品の裏側に、「聾米（ろうべい）」という文字をつけるようになりました。青木木米は陶芸だけでなく、日本画を描くのが上手でその掛け軸にも「聾米」とつけてあります。ただ、本人が聾として誇りを持っていたかどうかはわかりませんが、社会に対して私は聾者ですというアピールのような気がします。この聾の漢字がついていたおかげで、私たちは歴史を知ることができるのです。もしこの漢字が残っていなければ、こういった人物がいたという事実はわからないで終わっていたでしょう。文献を調べるうちに「耳が聞こえなくなった」と記述されています。この陶芸を作ったのは間違いなく、ろうあ者であることがわかるのです。それで興味を持つようになったら、この人物がいつ生まれたのか、どこで生まれてきたのか、親は誰なのかを調べてみると楽しくなり、過去の歴史が広がっていきます。この青木木米が生まれたのは京都です。亡くなったのは1833年です。お墓は京都にあり、とても立派です。

京都の東山というところにあります。大谷本廟（ほんびょう）、ここにお骨があります。偶然ですが、初代全日本ろうあ連盟長の藤本敏文のお墓も同じく大谷本廟にあります。その一人の人物からどんどん歴史を遡っていくことができます。一人のろうあ者がいたということにとどまらず、その人がどういう人だったの、その人を詳しく調べていくことで、とても楽しみがあります。そしてこの人の作ったものが実際にある。じゃあ見に行こうっていうことで探しに行って見つける。それも楽しみの一つです。

歴史の大切さについてお話ししましたけれども、他に大事な話しを話したいと思います。ここ北海道のろうあ協会、札幌のろうあ協会の歴史はどのぐらいですか？ 59年、長いですねぇ。設立した時の会長は誰なのか？役員は何人いたのか？会員は何人いたのか？が残っていますね。それも大事な歴史の一部です。先週鳥取に公演を頼まれて行ってきましたが、その時は鳥取のろう者協会が設立されて50年で、50年の歩みの資料が配布されました。こういったものを作り歴史を愛することはとても良いことです。昔の50年間の歴史があれば、それを使いながらさらに深めて100周年になった時に100年のものになると思います。みなさん是非50年100年150年というふうに作ってください。

歴史が大切で深みのあることがわかると思います。その資料を見て、昔の歴史を辿ると、「すごかったんだなぁ」というような状況をつかむことができますよね。資料は文章だけでなく、写真も入れるといいと思います。写真があって文章があると、その歴史を読んで参考になるだけでなく、どんな顔か、どんな様子かを知ることが出来るわけで、写真も大切だと私は思います。今度歴史のあゆみを作るときには文章だけでなく、写真も集めるといいと思います。

みなさんが楽しめるように見ていただきたいものがあります。本に載せているこの顔は吉田松陰さんですね。この写真の方は吉田松陰の弟で、杉敏三郎です。ろう者です。その写真は日本のろう者で最古の写真ではないかと思います。その写真をみると刀を持っている姿が印象的ですね。吉田松陰のもとの姓名は杉、養子に出されて吉田という性になっています。15歳離れた兄弟です。聾の弟をとてもかわいがっていたとのことです。弟をみて聾唖院を建てたいと思っていたようです。吉田松陰はペリー来航のときに密航を計画したが、失敗しましたね。萩で松下村塾を開いて、後の日本最初の首相の伊藤博文らを指導しましたが、あの時に弟の杉敏三郎も受講したとされます。やがて幕府に首を切られて殺されてしまいました。もし、生きていたら、日本最初の聾唖院を建てただろうと思います。杉敏三郎は、吉田松陰が亡くなった後は、独身のままで32歳の若さで亡くなりました。そのお墓ですが、先祖代々のお墓でな

く、墓石の表面には杉敏三郎だけ名前が彫られています。もし山口県萩というところに行く機会があれば、寄ってみてください。目立ちますのでこのお墓を見つけることができます。杉敏三郎のお墓は山口県萩市にある松陰神社の近くにあります。一つ面白い話しがありますのでお話しします。みなさんも知っているかどうか、こういうお酒があります。治聾酒。昔こういうお酒があったのです。知っていますか？

文献ではお酒を飲むと聾を癒すということです。聾を治すということでしょうか。そのお酒が良いということで、俳人で聴覚障害者の村上鬼城が飲み続けたようです。昔の箱型の補聴器をつけた人物写真がありますが、その方が村上鬼城です。はじめは軍人を志していました。しかし耳が聞こえなくなり門前払いにあいました。耳が聞こえない人はだめなんだと悔しい思いをし、父親の仕事を受け継いで裁判所の司法書士になりました。そして正岡子規に教えをこい、俳人になりこの治聾酒を飲んだようです。「治聾酒や静かにのんでうまかつし」と俳句を書いているんです。なぜか？自分が飲んだからです。こういったお酒があるのだということがわかり、この俳句によって治聾酒のことを研究することができました。また、「治聾酒の酔ふほどもなくさめけり」もあり、耳が聞こえないことの境涯にあることを表しているということですね。では休憩に入ります。

アメリカのことを話します。アメリカでは昔は先住民でインディアンだけいました。そこにイギリス人が入って色々開拓をして、繁栄してきたわけですが、アメリカの歴史は250年位とはいえ、歴史を大事にしている国だと感じました。

例えばラグビーやホッケーやバスケットボールとか野球の試合では、必ずアメリカ国旗があって、国旗に国家を歌います。そういう愛国心を持っています。アメリカの野球が好きなんですが、日本人のイチロー選手などが、アメリカでがんばっていますよね。テレビで野球を見てると、対戦する際に先に投げるピッチャー、始球式がありますね。

例えば、日本の野球でセパのオールスターゲーム。それぞれ選手を選抜したオールスターゲームがありますけども、そのときの始球式で、ミニスカートをはいた女性が始球式をしたこともありました。いつも始球式は女性の歌手とか、タレントになげてもらってますね。

それは日本の特徴ですね。それをダメとはいいませんが、アメリカは若いときに活躍した選手が辞めてから20年か30年以上たって、依頼されて始球式の際に一球投げることがあります。その時に一球を投げおわると、みんなと握手をしてお礼をし、その人の功績を称えます。観客も総立ちで拍手します。ですから日本のかわいい女の子が投げると言うのではなく、昔がんばってきた人たちを称えるという、アメリカのやり方のようにやってほしいというのが私の希望です。又、ヨーロッパ行ったときに色々見たのですが、古い建物が大事に保存され、歴史観が強く感じました。新しいものに変えるのではなくてそのまま残すことも大切なことだと思います。日本も奈良の大仏とか京都の古い建物をそのまま残そうとしていますよね。古いものはそのまんま残し、そこに観光客がきて、とてもうれしいことだと思います。

杉山杉風。この方も江戸時代です。この方は聴覚障害者です。俳句を書かれる方です。松尾芭蕉さんは奥の細道で有名な方ですよね。杉山杉風は松尾芭蕉の弟子です。松尾芭蕉はお金持ちではなく、貧乏な方だったようです。杉山杉風の親は漁師でとてもお金持ちのようで、そのために松尾芭蕉に部屋を貸して泊まらせた。

奥の細道に行くのにも旅費が必要ですよね。それが、杉山杉風の親のお陰らしいです。杉山杉風の家系図を追っていくと、直系の女性がテレビに出てる有名な方で山口智子です。このように面白い発見がありますから、他にもいろんな活躍をしている人の先祖にろうあ者がいたかもしれません。私が宮城で講演をしたときに珍しい上の名前を名乗る人と会いました。『私の名前は、「とら」といいます。漢字は「虎」です。よろしく』といいました。冗談かと思ったら、運転免許証まで見せていただきまして、拝見したら、間違いなく「虎」でした。本当にびっくりしましたね。虎と言う名前は非常に珍しいので、いつからか？ずっと先祖代々なのか？と質問しました。途中から変わったということで色々歴史を話してくれました。するとその方の先祖はとても偉い方だったのです。

宮城だったので昔、伊達正宗がいましたね。そ

の人の家臣だった國木という名前だったようです。虎が好きだったと言うことで、虎の絵を買っていろいろなところにはっていたようです。そこで伊達正宗が色々な戦いに勝って領土も広げ、その褒美として名前を「虎」に変えようということになったようです。そして「虎」と言う名前に変わったようです。ですから歴史を辿っていくと、新しい発見があるかもしれません。

名前のことでとても面白い話があります。今から話します。日本全国の名前を調べてみると、「聾田」という名前の方がいたことがわかりました。この方が実際に奈良にいることがわかりました。その方に連絡したいと思っているのですが、プライバシーのこともありますので、とても迷いました。結局、電話の104で調べましたが、１人だけなのですぐわかったようです。その方の電話番号を教えていただくことが出来て、聞こえる人にお願いして、その方に電話してみたら、名前は「聾田」で間違いありませんでした。その後、手紙をいただいたけれども、読み方は「ろうだ」ではなくて、「つんぼだ」と読むのだそうです。何故、「聾田」という名前になったのかも教えていただきましたが、地方に当時、聾田という村があって、その名前をとったとのことです。その聾田という地名が何故、つけられたのかをもっともっと調べてみると面白いことでしょう。ちなみに聾田さんという方は聞こえる方です。

先ほど江戸時代のろうの陶芸家などの話をしましたが、日本のろう者で歴史上最初の画家が「城間清豊」（ぐすくま せいほう）だと思われます。城間清豊は雅号を「自了」（じりょう）として活躍して、当時の琉球王国にとって国宝なみの人物でした。1614年に生まれ、1644年になくなりましたが、描いた絵は殆どが沖縄戦で燃やされたそうで、少ないとのことです。

歴史を調べる中で、存在したということだけでなく、その方の背景、生い立ち、家系図なども調べた方がいいです。私は自分の家系図を無くしてしまったのですけども、高齢のろうの方の家に行くと家系図を持っている方々いて見せていただいたことがありました。先祖が昔の天皇だったという方もいてびっくりしました。みなさんは持っていますか？持っていれば、それを調べるのも楽しむ一つの方法だと思います。以上で終わりたいと思います。

●司会　苦労様でした。とても勉強になることがいっぱいありましたね。那須さん対して質問したいことはありますか。

●中西　私は地元札幌にいます、名前は中西と言います。先ほど第１部の公演があって第２部の公演があるんですけども、那須さんの前に地元の中根のゼミがあって、その中に那須さんの書いた吉田松陰さんの弟がろうというお話しがありましたけども、私は昔山口の萩の方で吉田松陰の神社、資料館に行きました。身障手帳を出すと無料で入れたんですけども、その資料館の中にどこにもろうと書かれていなかったのです。どこで中根さんも那須さんもろうということを見つけたのか？探すポイントを教えて下さい。おかしいですか。吉田松陰さんのお墓があり、昔教えている様子ですとかありました。そこに耳の聞こえない人がいると書かれていなかったのですけども、那須さんがどうやって調べたのか教えてください。

●那須　今の質問ありがとうございます。吉田松陰はろうではなく聞こえる方です。この方の弟がろうあ者です。吉田松陰の資料や文献を調べるとその中に自分の弟はろうあ者ですと書かれてあったんですね。みなさん中学校高校で歴史を勉強していると思いますが、弟のことは書かれてないと思います。そういう歴史書では兄のことを書かれているだけです。弟の資料はないのです。でも熊本の方で聞こえる方が書いたんですが、弟について書いた本も出されています。「松蔭の唖弟」という本が出されています。よろしいでしょうか。

●司会　ありがとうございました。次、質問の方。

●沢田　札幌の沢田と言います。ちょっと失礼か

もしれませんけど、どちらを向いて話せばいいですかね。失礼な話しかもしれませんけど、大先輩にいろんなろうあ者がいたというのは聞いたことがあります。その話しを伝えたいんですけども、本当か嘘かわからないんです。それでちょっとお聞きしたいんですけど、昔明治よりもっと前くらいに生まれつきのろうあ者がたくさん殺されたと聞いていますが、明治に法律ができてから殺されずに育てられるようになった。そういった法律は本当なんでしょうか？

●那須　今出された法律ですが、私が中学の時に先輩から聞いた話しです。昔、江戸時代のろうあ者は殺された。生まれつき耳が聞こえない場合、布をかぶされて首を締められたという話しを聞いたことがあります。その証拠を知りたいと思って資料を探しましたが、ありませんでした。ですから資料が無いということで、今言っていることが正しいとか間違っているとかは言えないのです。なぜその先輩はそのことを知ったのか聞くと、自分もその先輩から聞いたということなのです。その先輩は亡くなっているのでわかりません。それが本当だったかどうかはわかりません。江戸時代に書いてある文献を見ると、ろうあ者は普通に暮らしていたような内容が書かれてありました。びっくりしました。

江戸時代に十返舎一九という有名な作家がいました。東海道を歩いた様子を書いたとても有名な人です。ろうあ者の様子を見かけてその様子も書かれています。ろうあ者は笠に墨で「聾」いう字をつけてかぶって、旅行でもしたようです。それを十返舎一九さんは「聾の笠印」と書いたわけです。多分、侍が通ったときに侍の言葉が聞こえずに歩いてその前を通りぬけるときに、聾という字が書いてあるとこの人は聞こえないと言うことがわかって先に行かせるということがあっただろうと思います。国会図書館にある文献に「聾の笠印」の意味が掲載されてありました。ろうあ者の暮らしを表しているものです。ろうあ者がどこか旅に出るときに、このような笠をかぶって道を歩いていると書かれているのです。

ですから先輩から聞いたろうあ者は、みんな殺されたという証明はありませんが、お金持ちの家に生まれると育つことができたのか、それとも名誉が傷つけられるということで子どもを捨てたりしたのか、それはわかりません。そこまで私たちは調べることはできないので、こういうことがあったかどうかはわかりません。

●橋本　私は隣の旭川から来ました橋本と言います。講演ありがとうございました。時間が無いと言うことで一つだけ聞きますが、吉田松陰が教えた松下村塾の教え子の中にろうの人がいたというのを聞いたことがあります。福沢という人で、吉田松陰の教えを受けてアメリカとかヨーロッパに行って、そして日本に持ちかえり聾学校を作ったというふうに聞いたんですけども、それが本当かどうか教えてください。

●那須　ご質問ありがとうございました。福沢諭吉ですね。本当かどうか？松下村塾の学生ではないと思います。福沢諭吉は違うと思います。

ヨーロッパに行って視察をしに行ったのは伊藤博文。その間違いではないかと思うんです。1000円札に載っていた伊藤博文。髭を生やした肖像画が載っていましたが、その伊藤博文は松下村塾の学生です。その伊藤博文は山尾さんという方らと一緒にイギリスに行き、視察をして、日本にそういった学校を作ると提案したようです。

伊藤博文は日本最初の首相になったときに、吉田松陰の考え方を変えた男で、ろうのお坊さんが広島の呉にいて、そのときに会われました。その坊さんを先生と呼んだそうです。普通は自分が首相になっていますから、他の人を先生と言うことは無いと思います。ですから伊藤博文だと思うのです。伊藤博文の話しは広島の報告にも載っています。読んでみてください。

●司会　以上で終了とします。最後にＰＲしたいと思います。。疲れたときに目を休めるためにいろんな資料を集めた写真集があります。写真ばかりですから、とても難しいものはありません。とてもきれいな写真です。目を休めることにもなる本です。那須さんが作った本です。買いたい方はどうぞサインを書いてもらうこともできます。明日またお会いしましょう。